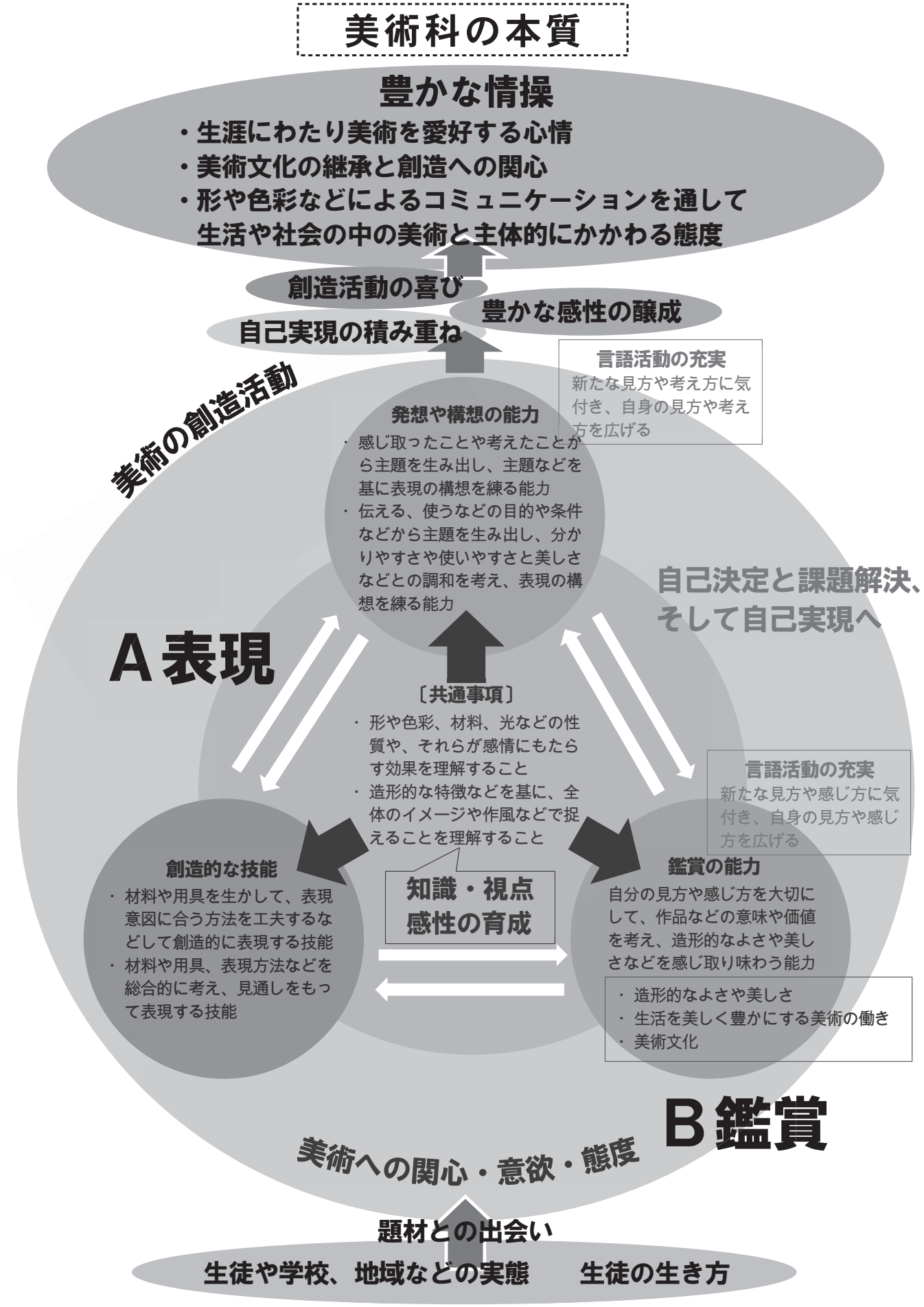
富山大学人間発達科学部附属中学校研究紀要　№70：「美術科」69－75（2017）

美　術　科


美術科の本質
豊かな情操
・生涯にわたり美術を愛好する心情
・美術文化の継承と創造への関心
・形や色彩などによるコミュニケーションを通して生活や社会の中の美術と主体的にかかわる態度
創造活動の喜び
豊かな感性の醸成
自己実現の積み重ね
言語活動の充実
新たな見方や考え方に気付き、自身の見方や考え方を広げる
美術の創造活動
発想や構想の能力
・感じ取ったことや考えたことから主題を生み出し、主題などを基に表現の構想を練る能力
・伝える、使うなどの目的や条件などから主題を生み出し、分かりやすさや使いやすさと美しさなどとの調和を考え、表現の構想を練る能力
自己決定と課題解決、そして自己実現へ
A表現
〔共通事項〕
・形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果を理解すること
・造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること
言語活動の充実
新たな見方や感じ方に気付き、自身の見方や感じ方を広げる
知識・視点
感性の育成
創造的な技能
・材料や用具を生かして、表現意図に合う方法を工夫するなどして創造的に表現する技能
・材料や用具、表現方法などを総合的に考え、見通しをもって表現する技能
鑑賞の能力
自分の見方や感じ方を大切にして、作品などの意味や価値を考え、造形的なよさや美しさなどを感じ取り味わう能力
・造形的なよさや美しさ
・生活を美しく豊かにする美術の働き
・美術文化
B鑑賞
美術への関心・意欲・態度
題材との出会い
生徒や学校、地域などの実態
生徒の生き方

美術科の本質について

美術科の本質は、「中学校学習指導要領解説　美術編」の教科の目標にもあるとおり、全ての生徒に「豊かな情操」を培うことを実現するために、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して「美術の基礎的な能力」を育成し、生徒がそれらの資質・能力を汎用して、試行錯誤しながら課題解決するとともに、自己実現を積み重ねることを通して、創造活動の喜びを味わわせるところにある。美術教育には表現のための技法の習得や美術を理解するために必要な知識の獲得を目的とする「美術の教育」と、美術の活動を通して人間形成を図る「美術による教育」という二つの側面がある。「豊かな情操」を培うためには、「美術の教育」を手段とし、「美術による教育」を目的として、そのどちらの側面も適切に関連させ、両立を図っていくことが必要であると考える。

美術科で育成する資質・能力

前述のとおり、美術科は全ての生徒に「豊かな情操」を培うことを目標としている。情操とは、美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心である。それは、知性・感性・徳性などの調和の上に成り立ち、豊かな精神や人間としての在り方・生き方に強く影響していく高次の資質・能力といえるものである。また、「生涯にわたり美術を愛好する心情」や「美術文化の継承と創造への関心」、「生活や社会の中の美術と主体的に関わる態度」など、学校教育を離れ、社会をよりよく生きるために必要な能力を内包するものだと捉えている。その「豊かな情操」を培うためには、左図のとおり「創造活動の喜び」を美術の表現及び鑑賞の全過程を通して、実感的に味わわせることが大切である。そして、「創造活動の喜び」は生徒が「自己実現を積み重ね」る充実した過程の中で得られるものである。

それでは、自己実現とは何だろうか。「美術教育概論」（大橋 功他編著）では自己実現とは「自ら探究、追求に値する課題（価値）を発見し、創造的に解決（価値実現）に向かい、人間としての全体的な統一性をもった成長」としている。「中学校学習指導要領解説　美術編」の教科の目標にある、「表現活動においては自己の心情や考え、イメージを基に自分が表現したいことをしっかりと意識して考え、それが自分の表現方法で作品として実体化していくこと」、「鑑賞活動においては自分の見方や感じ方に基づいて想像力を働かせて見ることで、作品に対する見方が深まり新たな発見をしたり感動したり、自分にとっての価値をつくりだしたりすること」がそれに当たるであろう。美術の創造活動の全過程の中で、「美術への関心・意欲・態度」を基に、「発想・構想の能力」や「創造的な技能」、「鑑賞の能力」などの美術の基礎的な能力を、〔共通事項〕を互いの視点として相互に行き来しながら高め合うことで、自己実現につながるのである。

美術科の本質に迫る授業づくり

美術の創造活動を通して育成する資質や能力を生徒に身に付けさせるためには、様々な題材を通して、身に付けさせたい資質・能力を明確にした授業づくりをしていくとともに、生徒や学校、地域などの実態に応じて、より生徒が学びやすい活動が設定され、生徒一人一人が題材を自分のものとして捉えていけることが必要である。また、表現と鑑賞の能力を相互に関連させながら高めていくために、発想や構想、鑑賞活動など、感性や想像力を働かせて思考・判断していく場面では、自分の見方や考え方、感じ方を大切にしながらも、〔共通事項〕の視点で対象や事象を捉え、言語活動を通して、新たな視点や価値に気付き、自分の見方や考え方、感じ方を広げていくなど、本質に迫る授業づくりを実践していきたい。

＜参考・引用文献＞

中学校学習指導要領解説　美術編　文部科学省（平成20年９月）
中等教育資料「育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にした美術、工芸における授業づくり」
東良雅人（平成26年５月～）
大橋　功他編著「美術教育概論（改訂版）」日本文教出版、2009年
福田隆眞他編著「美術科教育の基礎知識（四訂版）」建帛社、2010年

実践事例

1　題材名

第３学年　　時代や社会と美術

―「沖縄戦の図」は語る―

【Ｂ鑑賞（１）ア】〔共通事項〕ア,イ

2　美術科の本質と本実践の関わり

本校美術科では、美術科の本質を「全ての生徒に豊かな情操を培うことを実現するために、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して美術の基礎的な能力を育成し、生徒がそれらの資質・能力を汎用して、試行錯誤しながら課題解決するとともに、自己実現を積み重ねることを通して、創造活動の喜びを味わわせる」と捉えている。本実践は鑑賞領域の題材の実践であり、美術の基礎的な能力の中でも特に、自分の見方や感じ方を大切にして、身の回りの造形や美術作品、文化遺産などから主体的に造形的なよさや美しさなどを感じ取り味わう「鑑賞の能力」を育成する部分が大きい。そこで、鑑賞の能力を効果的に育成するため、次のように研究仮説を設定し、実践を行うことにした。

> 発想や構想、鑑賞活動など感性を働かせて思考・判断していく場面において、〔共通事項〕の視点から問いかけを行うことで、自分の見方や考え方、感じ方を広げていくことにつながる。

本題材では、「沖縄戦の図」を見て感じ取ったことや気付いたことを基に、この作品が私たちに何を語っているのか（作者の思いや意図など）を考えていく場面が、感性を働かせて思考・判断していく場面になると考えた。その場面で、〔共通事項〕の視点から問いかけを行うことで、作品から感じられることやイメージと作品に描かれているもの、形や構図、色や配色、描き方などの造形的な要素との関わりに目を向けさせ、それらを視点に作品について考えさせることで、感覚的であったもの（感じ方）の造形的な根拠が明確になり、作品を論理的に捉えることにつながるとともに、生徒自身の見方や考え方、感じ方が深まり、生徒自身にとっての価値を作り出すことにつながると考え、本実践を行うことにした。

3　実践内容

（１）題材設定の趣旨

中学校学習指導要領解説　美術編では、「鑑賞は単に知識や定まった価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい価値をつくり出す学習」とある。つまり鑑賞とは、教師から与えられる知識のみで作品を理解していく一方的な受け身の行為ではなく、生徒一人一人が主体的に作品を「見る」ことから始まり、そこから感じ取ったことを基に造形的な視点で作品を捉え、生徒自身が作品を意味付けていく能動的な創造行為である。さらに、生徒一人一人の考えを交えることで作品に対する考えが深まり、より多層な意味付けをしていくことができる。そこで、本題材では対話による鑑賞活動を行うこととした。対話による鑑賞活動は、作品から気付いたことや感じ取ったことを基に、鑑賞者同士のコミュニケーションを通して、作品を読み解いていく活動である。作品に対する思いや考えを述べ合うことで多様な思いを巡らせ、互いの意見を尊重しながら、見方や感じ方を広げていくことを期待し、実践に取り組んだ。

本題材では、丸木位里・丸木俊の「沖縄戦の図」を鑑賞した。この作品は国内最大の地上戦である沖縄戦（1945年）を民間人の目線で描いた絵画作品である。戦後40年近く経った1984年に制作された作品で、丸木位里・俊夫妻が沖縄戦を体験された人々や研究者などから証言を得て描き上げた。400cm×850cmという大きな画面の中には、沖縄の人々が互いに縄で首を締め合ったり、鎌で首を切ったりして集団自決する姿や沖縄の海が米軍艦隊で埋め尽くされる様子、血で染まる青い海、火炎放射器から放たれる真っ赤な炎、そこから逃げようとする人々、山になるほどたくさんの頭骸骨、正面に眼差しを向ける子供など、様々な場面や状況が写実的に描き出されている。このように様々な場面や状況が描かれているからこそ、生徒は、作品をよく見ている中で様々な気付きをもち、それらについて互いに考えを交わしていくことで、作品の内容についていろいろな捉え方をしていけるのではないかと考えた。そして、そこから様々な解釈や連想を広げることとなり、さらに生徒の作品の見方や感じ方が広が

ると考えた。

本校の第３学年では、10月に沖縄への修学旅行を実施している。本実践を行った2016年は、戦後71年であり、戦争を知る方々も少なくなっている現在、生徒たちにとって戦争とはどういったものなのか想像もつかないものであろう。沖縄戦とはどのようなものだったのか、この作品の鑑賞を通して考える機会とすることで、修学旅行での学びも深まるのではないかと考えた。

（２）生徒の実態

第１学年ではアンドリュー・ワイエスの「クリスティーナの世界」やジャコモ・マンズーの「椅子と果物」などの鑑賞活動に取り組み、形や色彩、材料などに視点を置いて作品のよさや美しさ、作者の心情や意図などを感じ取り、自分なりの思いや考えをもって作品を見ることができた。第２学年では定朝の「阿弥陀如来坐像」を鑑賞し、作品のよさや美しさ、作者の心情や意図のみならず、その時代の人々の考えや願いについても造形的な要素を視点にして見方を深めていった。第３学年では、前題材でパブロ・ピカソの「ゲルニカ」を鑑賞し、形や色彩などを視点にするとともに、制作の過程や制作の背景などの情報も利用して作品を見ていった。本題材では、さらに深まりのある鑑賞活動にしていくために、描かれているものや形、構図、色彩、描き方などの作品の特徴を視点に内容を整理することで、生徒自らの考えをまとめさせ、教師が生徒の思考の質を見取ることにもつなげて行きたいと考えた。

本実践の事前に行ったアンケート調査では、「美術の学習が好きですか」という問いに対して、「好き」・「どちらかといえば好き」と答えた生徒は79％であった。また、「美術の学習で、鑑賞は好きですか」という問いに対して、「好き」・「どちらかといえば好き」と答えた生徒は46％であった。「好き」と答えた生徒の理由としては、「自分の考えをもって見られるから」、「他の人の考えを聞けるから」などであった。「嫌い」と答えた生徒の理由としては、「見るだけはつまらない」「面倒くさい」などであったことから、これまでの鑑賞の授業が一部の生徒にとっては能動的な活動になっていない実態がみられた。本題材では、生徒自らが対象を積極的に見る姿勢を養うためにも、適切な指導の構えをもって授業に当たりたい。

（３）題材の目標

○　描かれているものや形、構図、色彩、描き方などの特徴や印象、作者の心情や意図と表現の工夫などに関心をもち、主体的に感じ取ろうとしている。

【美術への関心・意欲・態度】

○　描かれているものや形、構図、色彩、描き方などの特徴や印象などから、作者の心情や意図、表現の工夫などを感じ取り、自分の思いや考えを述べるなどして自分の価値意識を生み出しながら味わっている。　【鑑賞の能力】

（４）題材の構成（全２時間）

○「沖縄戦の図」を鑑賞する・・・・・・・・・１時間
・作品の特徴や印象を手がかりに、「沖縄戦の図」が私たちに何を語っているのか探る。

○「沖縄戦の図」の批評文を書く・・・・・・１時間
・探ったことを基に「沖縄戦の図」の批評文を書き、意見交流する。

４　指導上の工夫

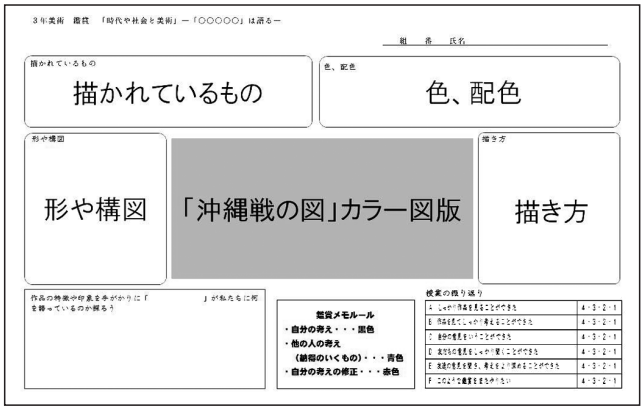
（１）実物大の「沖縄戦の図」の図版の提示

本題材では実物大（400cm×850cm）の「沖縄戦の図」の図版を生徒に提示した。実物と同じ大きさの図版は、生徒に対して驚きや感動を与えるものとなり、生徒が関心をもって作品を見ることにつながると考えた。また、その大きさから、作品の中に実際に入って見ることも可能であり、作品の中に描かれる様々な場面や状況を生徒自らがその場に行って見ることで、能動的な鑑賞活動につながると考えた。

（２）作品を見る視点を明確にしたワークシート

ワークシートには、描かれているものや形、構図、色彩、描き方などの項目を設け、造形的な要素を視点に作品の内容を整理してまとめさせることにした。作品から感じられることや考えたことがどのような造形的な要素に由来するものなのか、また、作品を見て見つけた造形的な要素から何を感じたり、どのようなイメージをもったりしたのか、ワークシートに記入していくことで、作品を論理的に捉えていくことにつながるとともに、作品に対する見方を深め、生徒自身が価値意識をもって鑑賞できると考えた。ワークシートの

形式は次のとおりである。



（3）考えの深まりに気付くメモのルール

生徒がワークシートに考えを記入する際には、自分の考えを黒色、話し合いで他の人の考えを聞いて納得のいったものは青色、自分の考えを修正するときには赤色といったルールを示し、生徒自身が自分の考えの変容を確認できるようにした。対話によって他の生徒の思いや考えを聞き、その中から自分の見方や考え方、感じ方を広げる視点を得て作品を見ていくことにつながると考えた。

（4）問いの工夫

生徒の発言に対して、「そこからどう感じるのか」や「どうしてそう感じるのか」など適切に問いかけることで、生徒の思いや考えの根拠を確かめ、より論理的・体系的な考えを引き出すとともに、作品を鑑賞する視点にもなっていき、生徒の見方の深まりや、見方や考え方、感じ方の広がりにもつながると考えた。

（5）作者の情報の提示

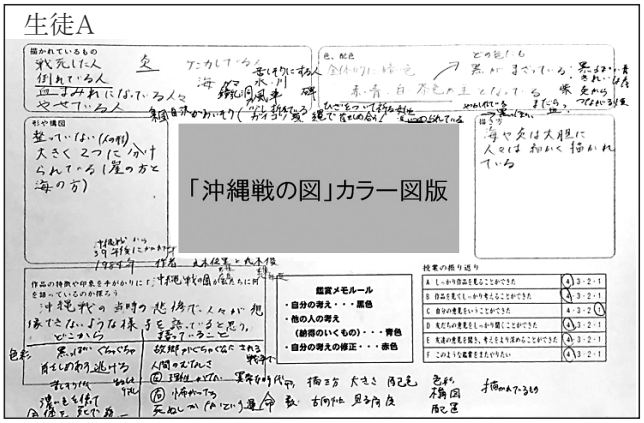
鑑賞活動の途中に作者の丸木位里・丸木俊の情報を生徒に提示した。―丸木位里は広島県生まれ、丸木俊は北海道生まれである。1941年に２人は結婚し東京で暮らしていた。1945年８月、広島と長崎に米軍によって原爆が投下された。数日後、位里、俊は位里の両親が住む広島へ行き、惨状を目撃することとなる。これが丸木位里、俊の「原爆の図」を描くきっかけとなった。そしてさらに、我が国最大の地上戦である沖縄戦を描いていくことになる―このような情報を提示することで、作品の特徴や印象に加え、作者が作品を描いた背景という新たな視点で作品をより広く深く鑑賞することにつながると考えた。

5　成果と課題

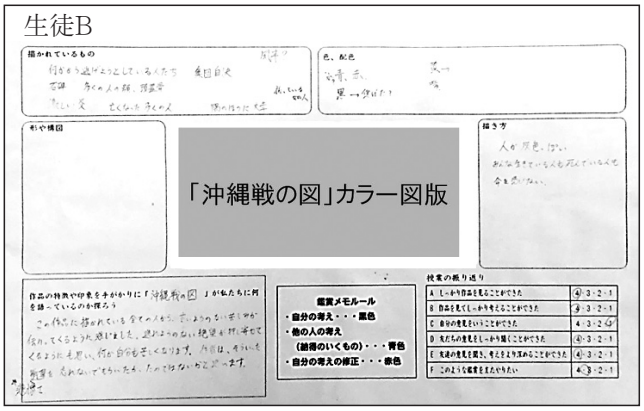
①　育成する資質・能力を明確にした題材の設定

本題材で育成する資質・能力は「鑑賞の能力」である。どの生徒にも自分の見方や感じ方を大切にして、作品の造形的なよさや美しさなどを感じ取り味わえるようにするために、作品を曖昧に捉えさせるのではなく、作品から感じられることやイメージと作品に描かれているもの、形や構図、色や配色、描き方などの造形的な要素との関係を考えながら捉えられるようにすることで、生徒が根拠をもって自分なりの作品の価値を作り出していくことが、この題材において重要な点であると考えた。そこで、前述のとおりワークシートの構成やメモのルール、問いを工夫することでより深く作品を捉えさせ、また、自分以外の他の生徒の思いや考えを取り入れながら生徒自身が見方や考え方、感じ方を広げていけるよう授業に臨んだ。以下は実際の生徒のワークシートである。

生徒A



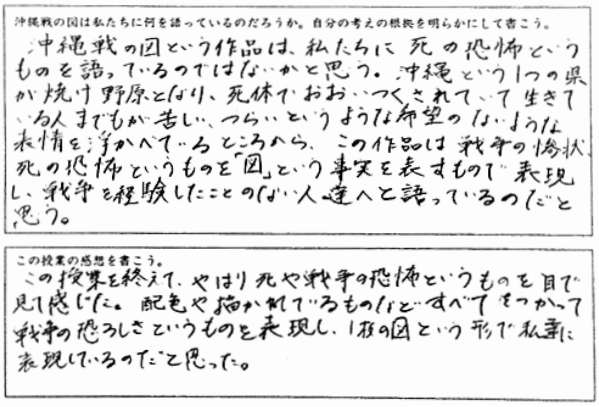
生徒B



どの生徒のワークシートからも、自分が感じたことや考えたことの他に、他の生徒の発言から納得のいく内容をワークシートにメモする様子（青色のメモ）が見られた。生徒は、色々な見方や考え方を取り入れな

がら作品を捉えていくことができていたと考えられる。また、作品の鑑賞後に、「作品は私たちに何を語っているのか」という課題で鑑賞文と授業の感想を書かせた。

生徒A

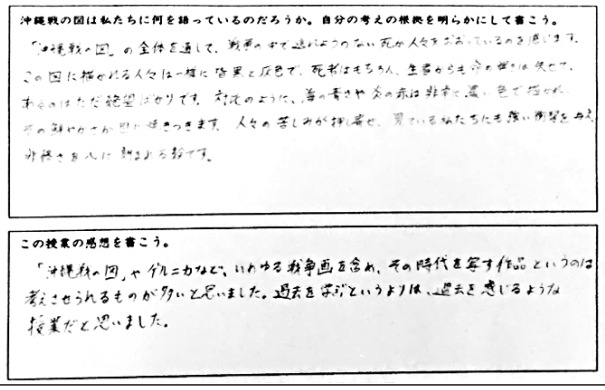

沖縄戦の図は私たちに何を語っているのだろうか。自分の考えの根拠を明らかにして書こう。

沖縄戦の図という作品は、私たちに死の恐怖というものを語っているのではないかと思う。沖縄という1つの県が焼け野原となり、死体でおおいつくされていて生きている人までもが苦しい、つらいというような希望のないような表情をうかべているところから、この作品は戦争の惨状、死の恐怖というものを「図」という事実を表すもので表現し、戦争を経験したことのない人達へと語っているのだと思う。

この授業の感想を書こう。

この授業を終えて、やはり死や戦争の恐怖というものを目で見て感じた。配色や描かれているものなどすべてをつかって戦争の恐ろしさというものを表現し、1枚の図という形で私達に表現しているのだと思った。

生徒B


沖縄戦の図は私たちに何を語っているのだろうか。自分の考えの根拠を明らかにして書こう。

「沖縄戦の図」の全体を通して、戦争の中で逃げようのない死が人々をおそっているのを感じます。この図に描かれる人々は一様に絶望と屈辱で、死者はもちろん、生者からも命の輝きは失せて、未来のはてなき絶望ばかりです。対比のように、海の青さや炎の赤は非常に濃い色で描かれ、その鮮やかさが目に焼きつきます。人々の苦しみが鮮明で、見ている私たちにも強い衝撃を与え、残酷さを心に刻まれる絵です。

この授業の感想を書こう。

「沖縄戦の図」やグルニカなど、いわゆる戦争画を含め、その時代を写す作品というのは考させられるものが多いと思いました。過去を学ぶというよりは、過去を感じるような授業だと思いました。

生徒Aの鑑賞文からは、作品に描かれている情景や人々の表情から作品の価値を見出していることが分かる。また、この作品が事実を表す「図」であると書いている。鑑賞の授業の他の生徒の発言の中で、「この作品は絵ではなく、現実をそのまま描き表しているので沖縄戦の『図』なのだろう」という発言があった。生徒Aにとってこの生徒の発言が大いに納得できるものだったのだと考えられる。一方、生徒Bの鑑賞文には、海の青や炎の赤の鮮やかさに対比されるように黒や灰色から死や絶望が強く感じられ、悲惨さが心に刻まれると書いている。鑑賞のワークシートの中では色に関するメモも見られ、色彩とそこから感じられる印象や感情を関連付けて作品を鑑賞した生徒の姿が見られた。

どの生徒も対話による鑑賞を通して、自分の見方や感じ方を生かしながら、他の生徒の考えも取り入れ、違った視点から作品を捉えることで、自分の見方や考え方、感じ方を広げていくことにつながっていったと感じている。

② 視点を明確にした問いや課題の設定

「沖縄戦の図」は描かれているものが非常に多い具象絵画である。視点が明確でなければ拡散的になりすぎて深まりのある学びにならない。授業では、「作品の特徴や印象を手がかりに、『沖縄戦の図』が私たちに何を語っているのか探ろう。」という学習目標を立てて鑑賞活動を行った。しかし、描かれているものや様々な形や色、特徴など膨大な事象を見つけ出すことに終止し、そこから何を感じるのか、なぜそう感じるのかといった、そこからさらに深まりの方向へ全体として到達できなかった面は否めない。生徒に作品のどこに注目させるべきかを予め考え、課題がより具体的になるよう絞っておくことも必要だったと感じている。それぞれの教材に応じた見せ方、すなわち作品の何を見せるのか、その視点をもたせるための発問、さらにワークシートの構成など、生徒に何について考えさせるかをより明確にしておく必要がある。

③ 生徒の主体的な学びの実現

授業では、生徒の発言に対し、教師が「そこから何を感じたのか」、「なぜそう感じたのか」などと問い、それに対して生徒が答えるといった一問一答形式のやり取りが行われた。ここでは教師が生徒に何を問いたいのかが明確でなく、それ以上の深まりがないものとなってしまっていた。生徒の考えに対して、他の生徒がその考えにつなげて自分考えを広げたり深めたりしていく授業こそが生徒の主体的な学びであると思う。そうしていくために、学習形態や生徒の発言をつなげていく発問、生徒から生まれた疑問から考えを深める活動など、学びの過程をから授業の構成を考え直したい。

＜参考・引用文献＞

丸木伊里・丸木俊「沖縄戦の図」佐喜眞美術館，2006年
丸木位里／丸木俊「原爆の図」小峰書店，2000年
佐喜眞道夫「アートで平和をつくる　沖縄・佐喜眞美術館の軌跡」岩波書店，2014年
京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター他編著「みる・考える・話す・聴く　鑑賞によるコミュニケーション教育」日本文教出版，2013
文部科学省「中学校学習指導要領解説　美術編（平成20年9月）」日本文教出版，2008年
東良雅人「育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にした美術、工芸における授業づくり」中等教育資料（平成26年５月～）学事出版株式会社
大橋功他編著「美術教育概論（改訂版）」日本文教出版，2009年